

『十地經論』における六相について

金 京 南

1. はじめに

六相概念の典拠は『十地經』（『華嚴經』『十地品』、以下『經』と略称）とされる。但し、先行研究に指摘されているように、六相の名称の漢訳は『經』をはじめとして諸異本において一致せず、「総相・別相・同相・異相・成相・壊相」という名称が見られるのは『十地經論』（世親作とされる、以下『論』と略称）の漢訳においてである¹⁾。

六相に関する従来の研究は、華嚴教学の立場から、『論』の六相を六相円融説の起源として位置づけるものがほとんどであり、『論』そのものにおける六相概念に関しては十分な研究が行われていなかったといえる。また、『經』との文脈上の相違を厳密に区別しなかったことにより、『經』と『論』それぞれの六相概念がほぼ同一視されてきたという点も指摘できる。本稿では、それぞれの文脈で用いられる六相の意味と異同に着目し、『論』における六相を中心として六相説を再考したいと思う。

2. 『經』における六相

『論』の六相を考察するに先立って、まず、六相の典拠とされる『經』における六相に目を向けたい。『經』の初地には、初地菩薩の起すべき十の大願が説かれているが、その四番目に

すなわち、すべての菩薩行の広く、大きく、無量にして、無区別であり、すべての波羅蜜に収められ、すべての地を清める、部分 (aṅga) と細分 (upāṅga) をもつものとして完成し、共通の特徴 (sālakṣaṇa) と別異の特徴 (vilakṣaṇa)、および生成 (vivarta) と破壊 (samvarta) をもつ、すべての菩薩行である地の道のあるがままの教説や波羅蜜の浄化に関する教示・教誡を授けることに支えられた発心を完成するために、法界に遍く広がり、虚空界を窮め、未来際を尽くし、すべての劫数と行数において途切れることのない発心

を完成するための第四の偉大なる誓願を完成するのである。

とあり、下線部が六相に相当する。この個所は、現行の校訂本において異同が見られ、Rahder 本には「sāṅgopāṅganirhārasalakṣaṇavilakṣaṇasaṃvartavivarta」(p.15)、Kondo 本には「sāṅgopāṅganirhārasalakṣaṇavilakṣaṇasavitarkasaṃvartavivarta」(p.20)、そして Vaidya 本には「sāṅgopāṅganirhārasalakṣaṇasaṃvartavivarta」(p.10) とある。ところが、最後の *saṃvarta-vivarta* については校訂上の問題があると思われる、上記の引用文の私訳は *vivarta-saṃvarta* の読みに従った。すなわち、*saṃvarta* と *vivarta* 両語の意味からも²⁾、また対応するチベット訳の「grub pa dañ 'jig pa」(D.177b3/P.61a5) や漢訳の「有成有壊」(T9.545b28) に照らしても、*vivarta-saṃvarta* の順が相応しいと考えられる。写本の中では、東大写本 No.167 の *vivarttasamvartta* (10a1) がこの順序を支持している。一方、No.165 には *savitarkasaṃvartta* (12b5)、No.166 には *savitarkasaṃvartta* (11a3) とあるが、「sa-」は『論』所引経文のチベット訳に見られる「dañ bcas pa」(D.139b/P.178b) に対応語があり、また、*vitarka/vitarka* は「vivarta」の誤りである可能性が考えられる。ちなみに、*Two Sanskrit Manuscripts of the Daśabhūmikasūtra*³⁾ 所収の Ms.A (8b1) には、この個所の解説が困難であるが、少なくとも東大写本と同様に *saṃvartta* で終わっていることだけは確認できる。

これに対して、六相の名称に関する既存の多くの訳は、Rahder 本にもとづいていることが分かる。テキストの詳細については他の諸写本の確認を含めて、改めて論及したい。

『経』におけるこの六相の具体的内容はいまだ明かでなく、大別すると、六相が菩薩行を形容すると理解するものと⁴⁾、教説の形式を説くとする二通りの解釈がある⁵⁾。後者は、次にみる『論』の著者による解釈に依拠するものと考えられる。

3. 『論』における六相

『論』における六相の用例をみると、まず導入部 *nidānaparivarta* において六相をもって経文を解説している個所があり、これとは別に前節に引用した経文に対して注釈を行なう個所がある。他にもいくつかの用例がみられるが、いずれも前者の範疇に入るといえる。前者の用例には六相それぞれの意味が解説されており、後の地論師は特にこの個所をめぐって六相説を展開するようになる。

『経』の冒頭に金剛藏菩薩が仏神力を受けて三昧に入る場面があり、続いてそ

の加持の意味などが説かれている。これに対し『論』はその經文を十句ずつ区切って注釈を行なっているが、その最初の二十句に対して次のようにいう。

十[句]などのすべての説示については、項目・細目という点からそれぞれ六種によって解説されることを知らねばならない。(中略) 六種とは何かというと、項目 (yan lag) と細目 (ñe ba'i yan lag) と共通の特徴 (mtshan ñid 'dra ba) と別異の特徴 (mtshan ñid mi 'dra ba) と集約 ('du ba) と詳説 (rgyas pa)である。このうち、項目は「初句、すなわち智慧の地に」入ることである。細目は残り「[の句]」である。なぜなら、「細目は」そ「[の項目]」にもとづくからであり、またそ「[の項目]」を完成させるからである。その二つの中で、「いずれも智慧の地に」入ることから、共通の特徴である。他の特徴をもつから、別異の特徴である。集約は要略することであって、項目を示すためである。詳説はそれを区別「して述べること」であって、細目を示すためである。すなわち、世間の消滅と生成のようである ('du ba ni mdor bsdus pa ste/ yan lag bstan pa'i phyir ro// rgyas pa ni de rab tu dbye ba ste/ ñe ba'i yan lag bstan pa'i phyir te/ 'jig rten gyi khams 'jig pa dan chags pa bzin no//)。残りの十句に対してもまた、まさに同様に、ふさわしく適用されねばならない。(D.106a4-b1/ P.134a4-b2)

『論』におけるこの六相に対しては、従来、世親の經典解釈方法論として理解されてきたが⁶⁾、最近大竹氏によって、瑜伽師の文献における総別による經典解釈方法を世親が継承したものとする見解が提出された⁷⁾。大竹氏の挙げている例の中に、『阿毘達磨雜集論』による総別の解釈がある。それによると、「項目・細目という門とは、そこにおいて一つの句によって提示 (*uddeśa*) があり、残り「[の句]」によって解説 (*nirdeśa*) があると説明される」⁸⁾とあり、それは 'du ba と rgyas pa に関する『論』の記述に通じている。すなわち、'du ba と rgyas pa はそれぞれ「項目」と「細目」を示す「提示 *uddeśa*」と「解説 *nirdeśa*」として位置づけられていたと見られる。一方、この個所の漢訳には yan lag bstan pa'i phyir ro と ñe ba'i yan lag bstan pa'i phyir te の二つの文が欠けており、ただ「成相者略説故。壞相者広説故。」とあるのみである。

また、以上の内容に照らすと、'du ba dan rgyas pa は前節の經文において校訂した *vivarta-saṃvarta* より、むしろ *saṃvarta-vivarta* の順に一致していることが分かる。おそらく世親は、『經』の六相を經典解釈法として採用するにあたって、意図のもとで *saṃvarta* = 'du ba, *vivarta* = rgyas pa と解釈したと考えられる。対応するチベット訳が『經』の 'grub pa dan 'jig pa から 'du ba dan rgyas pa に変わっている点もまたこれを示唆するといえる。但し、それに対応する漢訳は「壞相成相」で

なく「成相壊相」のままであり、『論』の漢訳される当時にはすでに六相の訳語が定着していたことが窺える。

4. まとめ

以上の考察の結果をまとめると次のようである。

まず、テキストの問題として、『經』の「生成と破壊」に相当する原語は *vivarta-saṃvarta* の順であったと推定される。次に、『經』における六相の具体的な内容については今後の検討が求められるものの、『論』における六相は、経典解釈法として用いられることにより、訳語や解釈上の変容をもたらしたと見られる。また、それをめぐってチベット訳と漢訳とのいくつかの相違がみられ、地論宗などによる六相の解釈と関連して興味深いのが、この点に関しては今後の課題にしたいと思う。

-
- 1) 坂本幸男 [1956] 『華嚴教学の研究』 (平楽寺書店) p.539
 - 2) vivarta : with or sc. kalpa, (period of) evolution of the world, after a periodic destruction (saṃvarta). *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* p.499
 - 3) Bibliotheca Codicum Asiaticum 10, Kazunobu Matsuda ed. 1996
 - 4) 龍山章真 [1938] 『梵文和訳十地經』 破塵閣書房、荒牧典俊 [1974] 『十地經』 中央公論社
 - 5) 伊藤瑞叡 [1988] 『華嚴菩薩道の基礎的研究』 平楽寺書店, pp.637-667
 - 6) 坂本 [1956]
 - 7) 大竹晋 [2005] 『十地經論 I 』 (大蔵出版) の補註 pp.356-357 参照.
 - 8) aṅgopāṅgamukhaṃ yatraikena padenoddeśaḥ śeṣair nirdeśa itī pradarśyate/, Tatia ed.p.142.15
「総別分門者，謂若處顯示，先以一句總標，後以余句別釋。」 (T31,766a8-9)

〈キーワード〉 六相, 『十地經論』, 『十地經』

(東京大学大学院)

vow's power.

194. *Vastuprativikalpavijñāna* in the *Laṅkāvatāra-sūtra*

Yu-shik CHUNG

The term *vastuprativikalpavijñāna* used in the *Laṅkāvatārasūtra* has so far been regarded as the *manovijñāna* or seven *pravṛttivijñānas* etc. However, it can be concluded from my investigation of the characteristics of its relevant terms as described in the *Laṅkāvatārasūtra* and the 『顯揚聖教論』 that the *vastuprativikalpavijñāna* is therein given almost the same characteristics as those of the *ālayavijñāna*.

195. On the Six Characteristics in the *Ārya-daśabhūmi-vyākhyāna* (ADV)

Kyung-nam KIM

The Six Characteristics (六相) generally have been positioned as the basis of the “Interfusion of the Six Characteristics” (六相円融) from the Huayan (華嚴) school’s standpoint, but not much study has been done on the Six Characteristics in the ADV itself. The purpose of this paper is to clarify the meaning of the Six Characteristics in the ADV, specifically focusing on the transfiguration of an equivalent and the context of the Six Characteristics.

In conclusion, we can find that the Six Characteristics, used as the method of annotation in the ADV, are more embodied in a comparison of the *Daśabhūmika-sūtra* (十地經). Also, it is noted that transfiguration of the Six Characteristics is shown more clearly in the Tibetan version of ADV than in the Chinese version.

196. On the Citation of the *Svapnanirdeśa* in the *bSam gtan mig sgron*

Izumi MIYAZAKI

The Gradualist chapter of the *bSam gtan mig sgron* (SMG), ascribed to gNubs chen Saṅs rgyas ye śes, cites from the *Svapnanirdeśa* (*Svap*), a part of